

【山梨県人権擁護委員連合会長賞】

バスの中で

山梨学院中学校

一年 千葉 叶 惺

僕は四月から中学生になり、毎日バスで通学をしている。

公共の場で、いろいろな場面に出会うことが多くなった。

ぼくが乗車するバスには、毎日乗っている男性がいる。その人は、ぼくが乗るより先に乗っていて、決まった場所で降りる。毎日カタカタと何かを打っていて、折り畳みの白い杖をさっと広げて降りていく。しかし、ある雨の日、混雑したバス内でいつものように杖を広げることができず困っていた。ぼくはそろそろ降りる停留所なのに大丈夫だろうかどキドキしながら見ていたら、その男性はすっと立って周りに声をかけながら手探りで降り外で杖をさっと広げていた。ぼくはその姿に強さを感じた。ある下校中のバスの中では、盲導犬を連れておばあさんにも出会った。初めて目にする盲導犬はすごくおとなしく、凜としていてとても頼もしく見えた。車内はその日も混雑していたが、周りの乗客もその盲導犬を踏んだり触ってしまったりしないように気を付けていた。知らない人の集まりの車内で、ちょっと連帯感のようなものを感じてなんとなくうれしく思った。またある日には、バスに一人のおじいさんが乗り込んできた。そしてある高校生の隣に座った。おじいさんは不意に高校生に手話で何かを問いかけていた。すると、高校生は戸惑う素振りもなく、おじいさんの問いかけに答えていた。手話で。場面が違っていれば、自分が問いかけられていたかもしれない、そう考えると自分は何もできなかったと思った。その高校生がとてもかっこよくみえた。小学校でのスクールバスでは起きることのない出来事に、毎日僕は驚いていた。

これらの出来事を体験した後、僕は小学生の時に先生がしてくれた話を思い出した。それは、国語の授業で文章を読んだ時のことだった。ある日ひとりの女の子が、親の都合で転校してきた。その子は生まれつき片方の耳がない。身体の一部を使って義耳を付けたため耳の形はあるが、少し形が違っていた。それが原因で、学校ではクラスメイトから耳の形を「ギョーザ」とばかにされ「あいつに近づくとギョーザがうつる。」と言われ、それが理由でまた転校したといった内容だった。その文章を読み終わると先生は改まった顔つきでいじめについての話をした。人間は誰にでも違いがある。その違いを認められずにいじめが起こる。人それぞれの違いを認めることでいじめはなくな

っていく。そう話していた。授業の終了時刻に差し掛かったところで、先生はこう言った。「この女の子は、今の私の奥さんです。」教室がざわつきながら授業が終わった。その瞬間に先生の話に重みを感じた。「人それぞれの違いを認めること」いじめはこれができないから起こるのか、僕はいじめの本質を教わった気がした。生まれつきの障がいは自分にはどうしようもないことだ。だけど、幼い頃から差別やいじめをされ続けることもある。幼い心に深い傷として一生残り続ける傷なのではないかと思った。

以前、パラリンピックの体験イベントに参加したことがある。県内の現役アスリート鈴木徹選手もゲストとして参加していた。そのイベントで、ブラインドサッカーの体験をした。実際に着用するアイマスクをしてシュートをした。ぼくはサッカーが好きで、休み時間も毎日のようにみんなでサッカーをしていたから、自信があった。しかし、ぼくは一発目に思いきり空振りをした。距離感がつかめなかった。二発目はボールには当たったもののゴロゴロシュートになってしまった。視覚がないとこんなにも難しくなることに僕は驚いた。さらに、体験のためにアイマスクをつけると光すら感じることもできず、一瞬恐怖を覚えた。周りを通り過ぎる人の声がだんだん大きくなり小さくなる。さっきまでは普通だった光景が、アイマスクをつけた瞬間、大げさに聞こえるようになり、落ち着かなかった。常にこのような状態で生活している人たちの苦労が僕にも少しだけわかった気がした。

毎日のバス通学で、いろいろな障がいを持った人に会う機会が増えた。その人たちはみんなと同じようにバスに乗り、それぞれ行く場所がある。障がいの有無に関わらず、それぞれの生活がある。

「人それぞれの違いを認めること」先生から教わったことが、いじめだけでなく何気ない通学時間にもつながっていると思った。

バスに乗るようになってから、様々な人がいる社会が少し見えるようになってきた気がした。人それぞれの違いはあるけど、それを特別のように見るのではなく、同じ地域に住む人として、同じバスの乗客として、でももし少しの手助けができるとしたら、些細なことでもあたり前のようにできる、そんな人になりたいと僕は思った。